

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：全身管理・全身疾患

2025年6月28日(土) 12:50 ~ 13:20 血 ポスター発表5（幕張メッセ展示ホール8）

## 全身管理・全身疾患

[P-033]

栄養指導と口腔リハビリテーションが口腔機能，食品多様性，栄養状態に及ぼす影響

○永尾 寛<sup>1</sup>、奥 由里<sup>1</sup>、藤本 けい子<sup>1</sup>、水頭 英樹<sup>1</sup>、田上 義弘<sup>1</sup>、渡邊 恵<sup>1</sup>、後藤 崇晴<sup>1</sup>、岩脇 有軌<sup>1</sup>、松田 岳<sup>1</sup>、岸本 卓大<sup>1</sup> (1. 徳島大学大学院 口腔顎顔面補綴学分野)

[P-035]

経カテーテル心臓手術前日に行った動揺歯の抜歯後に2回の再出血が起きた症例

○久野 彰子<sup>1</sup>、服部 馨<sup>1</sup>、高澤 理奈<sup>1</sup>、細入 枝里<sup>1</sup>、高村 友莉<sup>1</sup>、山崎 菜々子<sup>1</sup> (1. 日本医科大学付属病院 口腔科)

[P-037]

唾液中口腔細菌叢およびタンパクを標的とした認知機能低下スクリーニング法の検討

○出分 菜々衣<sup>1</sup>、小山 尚人<sup>1,2</sup>、大谷 有希<sup>1,2</sup>、加藤 慎也<sup>1,2</sup>、中村 卓<sup>1</sup>、尾崎 友輝<sup>1</sup>、吉成 伸夫<sup>1,2</sup> (1. 松本歯科大学歯科保存学講座（歯周）、2. 松本歯科大学大学院歯学独立研究科健康増進口腔科学講座口腔健康分析学)

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：全身管理・全身疾患

2025年6月28日(土) 12:50 ~ 13:20 血 ポスター発表5（幕張メッセ展示ホール8）

**全身管理・全身疾患****[P-033] 栄養指導と口腔リハビリテーションが口腔機能、食品多様性、栄養状態に及ぼす影響**

○永尾 寛<sup>1</sup>、奥 由里<sup>1</sup>、藤本 けい子<sup>1</sup>、水頭 英樹<sup>1</sup>、田上 義弘<sup>1</sup>、渡邊 恵<sup>1</sup>、後藤 崇晴<sup>1</sup>、岩脇 有軌<sup>1</sup>、松田 岳<sup>1</sup>、岸本 卓大<sup>1</sup> (1. 徳島大学大学院 口腔顎顔面補綴学分野)

**【目的】**

高齢者の「栄養面のフレイル期」には、食べこぼし・むせ・噛めない食品の増加などのオーラルフレイルが関与している。適切な栄養指導と口腔リハビリテーションによって、口腔機能だけでなく食品多様性や栄養状態も改善されると考えられる。本研究では、栄養指導と口腔リハビリテーションの介入が口腔機能、食品多様性、栄養状態に及ぼす影響について調査、検討した。

**【方法】**

対象は、2023年6月から2024年12月に徳島大学病院歯科外来をメンテナンス目的で受診した65歳以上の患者56名（男性21名、女性35名、平均年齢 78.1±6.5歳）とした。調査測定項目は、基本的調査として年齢、性別、基礎疾患、服薬状況を、口腔機能の測定では口腔機能精密検査を、食品多様性の測定として食品摂取多様性スコアと平井らの咀嚼スコアを、栄養状態の測定はBMI、MNA-SF、骨格筋指数（Inbody）を用いた。同日に、健康状態、栄養状態、食品多様性の結果を説明し栄養指導を行った。また、リハビリテーション指導として、口腔機能の測定結果の説明と本学口腔保健学科が作成したくっぼちゃん健口体操、ペコぱんだを用いたトレーニング、開口訓練を1日2回（朝食、夕食前）に行うよう指導した。3か月後に口腔機能、食品多様性、栄養状態を調査し、介入前の測定値と比較し、介入の有効性を検討した。

**【結果と考察】**

栄養とリハビリテーション指導を行った結果、口腔機能では舌苔スコア、オーラルディアドキネシス/Pa/、舌圧において機能の向上が認められた。また、食品多様性では、食品摂取多様性スコアが増加した。栄養状態においては有意な改善が認められなかった。舌苔スコアは、初回測定時に鏡を使って舌苔の付着状況と清掃方法を説明したことにより、3か月後に改善が認められたと考えられる。ペコぱんだトレーニングは健口体操と比較して短期間で効果が認められるトレーニングであると考えられた。また、被験者が日頃あまり意識していない食品多様性に焦点をあてて食生活の改善指導を行うことによって、食品多様性スコアが改善されたと思われる。一方、今回の被験者群では口腔機能が低下している被験者が少なく、短期間でのリハビリテーションによる効果が現れなかったと考えられる。

（COI 開示：なし）

（徳島大学病院生命科学・医学系研究倫理審査委員会承認番号 3457-2）

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：全身管理・全身疾患

2025年6月28日(土) 12:50～13:20 血 ポスター発表5（幕張メッセ展示ホール8）

**全身管理・全身疾患****[P-035] 経カテーテル心臓手術前日に行った動揺歯の抜歯後に2回の再出血が起きた症例**

○久野 彰子<sup>1</sup>、服部 馨<sup>1</sup>、高澤 理奈<sup>1</sup>、細入 枝里<sup>1</sup>、高村 友莉<sup>1</sup>、山崎 菜々子<sup>1</sup> (1. 日本医科大学付属病院 口腔科)

**【緒言・目的】**

カテーテルを用いた心臓手術は、従来の開胸手術に比べて患者の身体的負担が少ないため、高齢者に適応されることが増えている。今回、経カテーテル心臓手術前の周術期口腔機能管理として、脱落の危険がある動揺歯を抜歯し止血確認したにも関わらず、その後術前と術後の2回にわたり再出血が起きた症例について検討を行ったので報告する。

**【症例および経過】**

85歳男性。大動脈弁狭窄症，心筋梗塞，脳梗塞，高血圧，慢性腎不全，糖尿病の既往あり。大動脈弁狭窄症に対し，全身麻酔下で大腿動脈アプローチによる経カテーテル大動脈弁置換術を行う予定となり，手術前日，麻酔科診察後に口腔科を16時ごろ受診。右上の側切歯と犬歯の残根が動揺Ⅲ度であり，脱落の危険があったため抜歯を行った。この時点で抗凝固薬のエドキサバン（<sup>®</sup>リクシアナ）の服用があったため，抜歯窩に酸化セルロースを充填，2針縫合し，圧迫後止血を確認した。また，上顎にはその他の動揺歯に対し，手術時の歯の保護のためにマウスピースを作製した。抜歯の約1.5時間後に患者の病室に往診し，抜歯部位を確認したところ再出血を認めたため，再度圧迫止血し，手術時用のマウスピースを止血用として装着しながら就寝するように伝えた。翌日の午前9時に抜歯部位が止血されていることを確認し，その後手術となった。手術は10時から12時まで行われ，患者は術後ICUに入室したが，16時に抜歯部位より再出血ありと看護師から連絡があった。すぐにICUに行ったところ，マウスピース内で抜歯窩から出血していることが確認できた。浸潤麻酔下で抜歯窩を再搔爬し，酸化セルロースを充填後6針縫合し，さらにガーゼを抜歯窩に当ててマウスピースを装着することにより止血を得ることができた。

なお，本報告の発表について患者本人から文書による同意を得ている。

**【考察】**

本症例は経カテーテル手術であったため，抗凝固薬は手術の前日まで継続されていた。また，術後の抗凝固療法として，即効性のあるヘパリンが2回にわたり静脈内投与されていた。術前の抜歯は侵襲の少ないものであり，止血にも注意して処置したつもりであったが，縫合などが不十分であった可能性がある。手術前に動揺歯を抜歯する場合，術後の抗凝固療法にも注意し，止血処置をより厳密に行う必要があると考えられた。

（COI開示：なし）（倫理審査対象外）

一般演題（ポスター） | 一般演題（ポスター発表）：全身管理・全身疾患

2025年6月28日(土) 12:50 ~ 13:20 血 ポスター発表5（幕張メッセ展示ホール8）

**全身管理・全身疾患****[P-037] 唾液中口腔細菌叢およびタンパクを標的とした認知機能低下スクリーニング法の検討**

○出分 菜々衣<sup>1</sup>、小山 尚人<sup>1,2</sup>、大谷 有希<sup>1,2</sup>、加藤 慎也<sup>1,2</sup>、中村 卓<sup>1</sup>、尾崎 友輝<sup>1</sup>、吉成 伸夫<sup>1,2</sup> (1. 松本歯科大学歯科保存学講座（歯周）、2. 松本歯科大学大学院歯学独立研究科健康増進口腔科学講座口腔健康分析学)

**【目的】**

近年、元気で歯科医院に通院される高齢者が増加している。本研究では、自立高齢者の認知機能低下と口腔機能、歯周病との関連について明らかにする。さらに、口腔細菌叢および口腔細菌産生タンパクを標的とした認知機能低下をスクリーニングする方法を検討することを目的とした。

**【方法】**

対象者は全身疾患に罹患していない高齢者で、全身因子の影響を可及的になくした状態で認知機能と口腔内の状態の関連を分析した。すなわち、60歳以上の自立高齢者23名(男性14名、女性9名)を対象とし、除外基準は、現在歯数20歯未満、認知症および歯周病と関連する全身既往歴を認める者とした。安静時唾液からの口腔細菌叢解析は16S rRNA遺伝子部分塩基配列を標的としたアンプリコンシーケンス解析および予測メタゲノム解析を実施した。

**【結果と考察】**

認知機能低下群（N=11、平均年齢 81.1±7.6歳）は正常群（N=12、平均年齢 76.1±7.3歳）と比較し、現在歯数が少なく、プロービング時の出血の割合が高く、口腔機能（特に口唇、舌）の巧緻性および速度の低下を認めた（すべて $P<0.05$ ）。口腔細菌叢解析の結果、マイナーな細菌が均等に存在する確率が高く、歯周病関連細菌である *Tannerella* 属が検出された（ $P<0.05$ ）。また、口腔細菌の産生タンパクである Cytochrome C Oxidase Copper Chaperone COX11 および Soluble cytochrome b562 が、認知機能低下群において正常群よりも有意に割合が低下していた（ $P<0.05$ ）。よって、認知機能低下群では歯周病関連細菌やミトコンドリア機能変化による神経変性関連タンパクの存在が示唆された。（COI 開示：なし）（松本歯科大学 倫理審査委員会承認番号 0301）